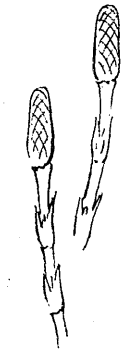

四月の幼兒童謠

葛原しげる

四月は、まさに春酣、野に山に霞こめて、都は桃櫻をこきまぜて、です。そこで古から、「春の彌生のあけぼのに」です。四方の山邊を見渡すまでもなく、花ざかりの白雲のかゝりぬ峰こそなかりけれ、ですが、さうした美しい表現は、勿論、子供の世界のものでなく、幼兒の童謠ではありませんが、明治十九年發行にかゝる大阪出版の『幼稚園歌集』の中には、次の二篇があります。その前者は、

――おりなす錦――

おりなすにしき　さくらにすみれ
いばらにぼたん　はるこそよけれ
うぐひすかはづ　こよ〳〵〳〵と
ともよびかはし　さそへるものを
われらがともも　やなぎのかげに
あそびてうたへ　うたひてあそべ
はるかぜふけば　みやまはわらひ
みぞれやゆきは　ゆめのゝかすみ
もゝとり千鳥　こよ〳〵〳〵と
われらがともも　やなぎのかげに
あそびてうたへ　うたひてあそべ

――花咲くはるの――

はなさくはるの　あけぼのを
はやとくおきて　みよかしと
なくうぐひすも　こころして
ひとのゆめをぞ　さましける
ほうほけきよ　ほうほけきよ

けきよ〳〵　けきよ〳〵
ほうほけきよ
ほうほけきよ　ほうほけきよ
けきよ〳〵　けきよ〳〵
ほうほけきよ

ですが、二節ともに、「こよ〳〵〳〵と」と「柳のかげに遊びて歌ひ、歌ひて遊べ」とがあります。その二つの句の耳への親しみはありましても、幼兒に、すぐ親しまれさうもありませず、次の『花咲くはるの』にしましても、『鶯』といふ題にしてないのが、なぜかと問ふまでもなく、端的に、さうしないで、第一句の發句をとつて、そして、その美しい句を生かして、やゝ氣ごつて、かうしたものと見えますが、「ホーホケキヨ、ケキヨ〳〵」の擬聲は、幼兒にも親しいものでありますものゝ、「はやくおきてみよかし」も「そ……ける」も六かしいことです。

明治十九年といはず、當時代の幼稚唱歌に限らず、琴にしても、三味線にしても、手ほどきの曲も、その歌詞は六かしいことでした。

明治三十四年頃の『教科適用、幼年唱歌』になりますと、「てふてふ」と書かないで「ちよーちよ」とする程になつてゐますが、しかし、「風は、そよふく、そよふく風に」なつてゐまして、まだ、中々、幼兒のものでありません。

——ちよーちよ——　石原和三郎氏歌　納所辨次郎氏曲

うめがちるのか　さくらの花か
白にちよーちよが　ひら〳〵まふよ

山ぶきちるのか　なたねの花か
きいろのちよーちよが　ひら〳〵まふよ

かぜはそよふく　そよふくかぜに
花とちよーちよが　おにごとするよ

（教科適用幼年唱歌）

また、同じ集の中にも、『春の野』と書かずに『春のの』と目觸りにさへなる書き方になつてゐるのですが、その行屆いた氣持は肯なはれましても、「吹くとも見えぬ春風を、なびく柳に知るばかり」といふ美しい表現はありましても、やはり、まだ十分に、幼兒のものになりきつてありません。

——春　の　の——　田邊友三郎氏歌　田村虎藏氏曲

ましろにみえし　ゆききえて
のはおもしろく　なりにけり
草もはえ　木もめばり
ひばりなき　ちよーもとぶ

ふくさもみえぬ　春かぜを
なびくやなぎに　しるばかり

いつかさまちし　花さきて
日もあたゝかに　なりにけり
　さもさそひ　かごさげて
　すみれつみ　れんげさり
あそぶもたのし　春ののに
ながきひかげの　うつるまで

○

――開いた開いた――

開いた開いた　何の花が開いた
蓮華の花が開いた
開いたさ思つたら
いつの間にか　つぼんだ

つぼんだつぼんだ　何の花がつぼんだ
蓮華の花がつぼんだ
つぼんださ思つたら
いつの間にか　開いた

年代は不明ですが、昔も今も、遊戯唄でもあるところの此の『開いた〳〵』は、結構です。しかし、これは、地方によつて多少變つてゐまして、廣島高師附屬小學校の編纂にかゝる『續日本童謠民謠曲集』によりますと、千葉縣野田町地方のものとして集錄してある右の歌詞は、恐らく、全國的のものでせう……現に東京でも、かういつてをります。ところが、同じ本に栃木縣茂木地方のものとしては、各節の「いつの間に」が「見る間に」と變つてをります。その何れが正しいといふことは出來ませんが、しかし、此の「なの花が」「蓮華の花が」の「が」の省略は宜いとしましても「いつの間にか」の「か」を省略しては困ります。即ち、

開いた開いた　何の花開いた
蓮華の花開いた
開いたさ思つたら

までは平氣であるばかりか、却つて、强められてもゐて、效果的でもありますが、

「いつの間に　つぼんだ」

となつては、

「いつの間にか　つぼんだ」

といふのは、意味が變つて來て、困ります。一體、なぜ、かうなつてゐても、保姆の方々も、お母樣方も氣がつかないで、平氣で、あり得るのでせうか。それは、その遊戯唄としての使命は、歌詞の中の「開く」と「つぼむ」といふことにのみ重點が置かれるからで、また、その曲のリズムに引

力があるからではないでせうか。しかし、そもく、詞なくしては曲もなく、動作もないのですから、心しなくてはなりませぬ。時々、國歌『君が代』が、「きみがわよをは」になつたり「さゞれ」と「石」とが、別々になつたり殊に、「巖」が分らないので、「岩音」に考へられたり、甚しいのになりますと「庭音」にさへ誤られてゐる事があるのです。凡そ、唱歌といへば、とかく、曲に重きを置くのではなくても、そのメロデーに、先づ、關心をもつて、選擇され、取捨される傾向はないでせうか。

○

さて、大正初期の拙作の中に、かつて、東京本郷お茶水に女高師があつて、幼稚園も、そこにあつた頃、全國の保姆大會か何か、地方の方々も御會合の席で、私と小松、梁田兩氏が、前年來幼兒の爲の『大正幼年唱歌』の新作に著手しまして間もない頃、幾曲かの批評を乞ふべく、試演しました時、次の『蝶と春風』の中の

菜の花　ゆらぐ
　ゆらぐな　花よ

といふ「ゆらぐ」が、問題になつた事があります。詳しい事は、舊著『童謠教育の理論と實際』に說いておきましたが、「ゆらぐ」といふ語彙は、幼兒の世界にはないから「うごく」にしてほしいとの仰せであつたのです。それで、

　のどかな風に
菜の花　うごく
　うごくな　花よ
　とまれよ　蝶々

と直しはしましたが、作曲者梁田貞先生も、

「どうも、『うごく』と『ゆらぐ』とは、氣持も違ひ、言葉の音學的要素も大違ひだから、「ゆらぐ」といふ新語と、その內容とは、說明しても、教へて、覺えさせて、同時に、柳の長い細い枝が、風に動くのは、實は、「動く」といはないで、「ゆらぐ」又は「ゆれる」――のであるこまでも覺えさせてほしい、と、考へ定めて、原作どほりに復活させたものであります。

――蝶と春風――　葛原しげる作歌　梁田貞氏作曲

ヒラヒラ舞ふよ
きれいな蝶々
蝶々がまへば　菜の花ゆらぐ
　ゆらぐな　花よ
　とまれよ　蝶々
　靜かに　とまれ
　きれいな　蝶々

ソヨソヨ風が
のどかに吹くよ
のどかな風に　菜の花ゆらぐ
ゆらぐな　花よ
こまれよ　蝶々
のどかな　風も
吹くなよ　吹くな　（大正幼年唱歌第一集）

○

春の花は、桃よりも、櫻こそ日本的であり、まづ全國的でありまして、國定教科書卷一の第一頁から、

サイタ
サイタ
サクラ
ガ
サイタ

であります。國語教授のうれしいスタートであります。私の舊作でも、同じ氣持から、大正三年、はやくも、次の一篇をもつて、スタートをきつたのでした。これについても、その第二節は、私の創案ではなくて、今の勤務してゐる九段精華學園の、實況でありまして、『童謠教育の理論と實際』に詳しく記述しておきました。

――さ　く　ら――

櫻が咲いた　櫻が咲いた
野にも山にも　櫻が咲いた
咲いた櫻に　朝日がさして
野山のこらず　花の雲

櫻が散るよ　櫻が散るよ
蝶々のやうに　櫻が散るよ
風に吹かれて　お池を越えて
櫻どこまで　散つて行く

葛原しげる作歌
小松耕輔氏曲

「幼年唱歌」第一集より

この櫻は、多くの類作があります。

――さ　く　ら――

野邊に　山に　櫻の花が
咲いた　咲いた　きれいに　咲いた
花の下で　太勢遊ぶ
歌を歌ひ　鬼ごっこしたり

ひらり〳〵　きれいな花が
散るよ〳〵　櫻の花が

石原和三郎氏作歌
米國民謠

肩の上に　あたまの上に
ごまる花は　歸りのみやげ　（童謡名曲全集）

これは、曲が、如何にも、チラ〳〵、ヒラ〳〵ごいふ感じの、明るく輕やかな趣に滿ちてゐて、床しいものゝ一つでせう。

――さ　く　ら――　西村醉香氏歌　室崎琴月氏曲

ひら〳〵さくら　お庭に散れば
お池の金魚も　目をさまし
春の日永を　遊びます

ひら〳〵さくら　お庭に散れば
籠の小鳥も　眼をさまし
春の小唄を　歌ひます　（童謡名曲全集）

これは、各節第三行の「春の――」の次を、幼兒は、取違へて歌ひさうです。もし、「春の小唄を遊びます」ごも歌つたら困ります。

――櫻――　芦田惠之助氏歌　田村虎藏氏曲

春風吹いて　野山はかすむ
霞のうちに　咲く山櫻
美し〳〵　その山櫻
朝日の光　さしそへば
山は一面　花の雲

春風降りて　柳はめぐむ
柳のうちに　咲く八重櫻
美し〳〵　その八重櫻
夕日の光　さしそへば
里は一面　綾錦　（同　上）

晴れやかに、華やかに、やさしく美しいメロデーで、明治時代には、よく歌はれたものです。

――櫻　と　小　鳥――　野口雨情氏歌　本居長孝氏曲

いゝ歌聞かそ　いゝ歌聞かそ
櫻の花の　いゝ歌聞かそ
小鳥の歌の　いゝ歌聞かそ

櫻の歌は　ごの子に聞かそ
小鳥の歌は　ごの子に聞かそ
あしたの朝は　この子に聞かそ　（同　上）

二節に書き分けてみましたが、それは、歌の内容の區別

から――しかし、意味は、全然別ですから、曲は、多くの童謡や唱歌のやうに、反覆はしなくて、別曲になつてゐます。いゝえ、全部が、只一曲なのです。それが本當なのです、それでこそ、歌詞による作曲です。いつの程よりか、童謡も唱歌も、各節同曲のものにきまつたかの觀もありますが程になつてをりますだけに、心すべきことです。

――花のトンネル――　奥野庄太郎氏歌　梁田貞氏曲

堤のお花は　眞さかり
櫻のトンネル　一二三
お手々をつないで　かけ出せば
花ひらひら〳〵　一二三
お花のにほひが　のごまで通る
堤は長いよ　一二三　（同　上）

けだし、幼兒でなくても、此のトンネルは、ニコ〳〵して、かけぬけるのが惜しくて、ゆきつ、もどりつ、よい氣持でせう。

○

前に出し忘れましたが、蝶の童謡には、昔のスペイン民謡だとかの一篇が、久しい昔から傳はつてをります。

てふ〳〵　てふ〳〵　菜の葉にとまれ
菜の葉にあいたら　櫻にとまれ
さくらの花の　さかゆる御代に
とまれよ　あそべ　あそべよ　とまれ（小學唱歌）

これが第一節で、第二節には「ねぐらの雀」の歌がつけてあります。曲につけた歌としては、上乘なもので、如何にも、ヒラ〳〵とんでゐる感じの豐かに出た曲を、よく活用してあります。

――てふてふ――　北原白秋氏歌　宮原禎次氏曲

てふ〳〵　てふ〳〵　からまつ山は
まだ日が寒く　ちら〳〵　とべよ
てふ〳〵　てふ〳〵　三月二日
霧雲はやい　ぬれ〳〵とべよ
てふ〳〵　てふ〳〵　からまつばらは
唐松原は　もう芽が　もえる
木ふかく　とべよ　蝶々　蝶々
ちんころぐさも　林に赤い　大きくとべよ（同　上）

少し六かしくても、よい歌よい曲、今の幼兒は幸福です。春は三月、新暦では四月こそ、いえ、五月は、それこそ、春のまん中、五月こそ春は酣、雲雀に、野遊びに、樂しい時に、幼兒を、戸外に遊ばせて、大に、心身の伸長をはかりたいものです。（つゞく）